

『義経磐石伝』私論

一 『義経磐石伝』について

『義経磐石伝』という作品がある。『日本古典文学大辞典』（岩波書店）に拠ると、「六卷八冊。読本。渡頭一舟子（都賀庭鐘）作、薮関月・大原野画。筆工は高安蘆屋。角書「繡像」。文化三年（一八〇六）大阪河内屋吉兵衛ら刊。巻頭の文貫こと河内屋喜兵衛の説明によれば、庭鐘の在世中の天明三年（一七八三）十二月十二日に出版許可を得ていたが、大阪出版書籍目録、死没のため日の目を見ず、文化期の読本流行の風潮にに応じて刊行したという。（徳田武執筆）とある。

この本には『義経戦功盤石伝』の外題を持つ後刷本（学習院大文学部国文学研究室蔵本など）も存在するし、稲田篤信校訂解題「義経磐石伝」¹も備わるが、今回は早印本とおぼしき国立国会図書館蔵本（大惣本）を底本とした。

まず、『義経磐石伝』（以下『盤石伝』）の成立事情について書かれた序を引用してみる。

這一部の演義は当初繁夜話英草子などの小説をあらはせりし一舟子、号近路行者の作にして、那うしいませかりしときこ

北見 泰宏

の書をも世にあまねくせむとて、浄写のことは高蘆屋、繡像のことは薮関月によさして、はやくその書全かりしに、うし下世の、ち其事輟て、むなしうはたちはかりのとしをへたり。今やとりかなくあつまより、をしてるなにはのふみやまで小説めきたるもの、本を梓にもさくらにもえりて鐫るときにあひたるに、さはかり名高うおはせりしうしの遺書をあたに函底に秘めをくへき事かほと、同志にはかりて、今茲文化丙寅の冬はしめて此書を世に広うするものなり。かくいふものは文うる翁文貫なり。

「はやくその書全かりしに」というのは、天明三年十二月十二日にすでに出版許可を得ていた（『大阪出版書籍目録』）ことで、刊記にも「天明三年許可」と見える。「今やとりかなくあつまより、をしてるなにはのふみやまで小説めきたるもの、本を梓にもさくらにもえりて鐫るときにあひたるに」とあるので、この文化初期には江戸でも大阪でも小説が非常に盛んであり、有名な「繁夜話英草子」などの小説をあらはせりし一舟子、号近路行者」が書いたこの作品を世に出すことになったということが知れる。また、わざわざ「繁夜話英草子」とことわっているということは、少

なくとも文化三年の時点では「繁夜話英草子」の作者として、庭鐘の名が知られていたと考えられる。でなければ、作者の死後、何十年もたつてから、わざわざ古い作品を世に出すということはないであろう。

さて、『磐石伝』は題名からもわかるように源義経を扱った歴史小説である。磐石とは大きな岩のことで、平安北山にあつたという大きな奇石に、義経の母常磐が祈つて生まれたのが牛若丸である、というところから物語はスタートする。やがて義経の父源義朝は平家との戦いで命を落とす。平家の追手から逃れる途中、売石叟に助けられるが、結局は平清盛につかまり、その側室となる。母の身と引き換えに命を救われた牛若は鞍馬寺に入れられるが、先の売石叟の勧めに随い奥州の藤原秀衡を頼る。やがて義経は全盛期を迎えるが、それも長くは続かず、都を追われ、吉野に逃れることになる。逃亡中、義経は鑑石の仙人と売石叟に救われ、奥州に赴く。秀衡没後、その息子泰衡に攻められたので、義経と弁慶らは蝦夷、空人島とのがれ、そこから金の本国鞆鞆に渡つた。義経の子経国は元の太宗十三年に清和国を建てた。

以上が大まかなストーリーであるが、便宜上、六卷十八篇の「義経磐石伝総目録」を掲げておく。

卷之一

- 一 常磐鏡石に子を祈る。鱗尼を単闕に育する事
- 二 売石叟難婦を護送す。細幼龍門に躲る事
- 三 難婦自己像を造る。将雛各網籠を脱る事

卷之二

- 四 常磐主を換て事る。藤源氏混姓の雑談ある事
- 五 晋の羊后兩國に皇后と為る事
- 六 入内の質使私に語る。常磐立后より御座を参りし事

卷之三

- 七 頼政桑道を責る。義経参陣頼政を翼る事
- 八 先の太后剃髮幽棲す。六道物語虚妄といふ評
- 九 平族歌道に深き評あり。源三義経の冤を断する事

卷之四

- 十 義経都に在判する。畠山梶原気性異なる事
- 十一 弁慶後乗を勉む。売石叟正純を捕る事
- 十二 漢の韓信大功有て讒言を被し事

卷之五上

- 十三 陽に大洲の波に、起き隠て吉野の雪に埋る事
- 十四 西行奇に忠信を扶け、布裙隊に尤物を認る事

卷之五下

- 十五 有綱戦て判官の憤を吐。大石辟て判官を救ふ事
- ### 卷之六上
- 十六 売石叟保て関を脱る。判官奥に入秀衡没後の事
 - 十七 小柴の客店に同志語。判官志を得て赤光を視す

事

卷之六下

- 十八 楮造の像に怪有岩家に鎮す。義経宋国に至て胡王と成る事

物語はこの大きな流れの中途に、「草史氏云」「稗史氏曰」「情史氏云」など、作者庭鐘の意見と思われるものや、中国の歴史上の類話などが挿入している。同時に、いわゆる判官物であるので、義経が登場する一般的な筆記である『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』『義経記』『吾妻鏡』などを基礎にして話が構成されている。途中で中国の史書の挿入するあたりは、漢文に明らかった庭鐘ならではの作品といえるかもしれない。

二 「史之余」

中村幸彦氏は、「読本初期の小説観」²⁾で、庭鐘が自ら考えた小説観を具現化した作品として、『英草紙』『繁野話』『莠句冊』『義経磐石伝』を挙げて、庭鐘が小説を「史之余」として見ていたことを指摘している。それは『英草紙』の第五篇、「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」で、鎌倉時代の人々を、南北朝に生れ替らせる筋に於て、一々に史的評論を加えたからであり、また『磐石伝』で、「草子子曰」「情史子曰」などと記して歴史的な穿鑿を付したためであった。

また、清田儋叟訓訳の『照世盃』（明和二年刊）をあげて、

（清田儋叟は*筆者注）一に、小説は「史之余」であると考えられている。自ら訓訳した『照世盃』の序には、

小説ハ史ノ余也、閭巷ノ故事ヲ採リ、一時ノ人情ヲ繪ス、
妍媸其ノ報ヲ爽ス、善悪直ニ其ノ隠ヲ剖、天下ノ敗行越
喚ノ子ヲシテ、惴惴然トシテ目ヲ、側而、視テ海内尚

若^{カク}ノ輩^{ゴトキ}ノ有ツテ、好悪ノ公ヲ存シ、是非ノ筆ヲ操ル、蓋^ソ其レ志ヲ改メ慮ヲ変へ、以テ身後ノ辱ヲ貽^{ハチ}コト無ラザルト曰ハ使、是レ則チ酌元主人（『照世盃』の編者）ノ素心也哉（儋叟の訓に従つてよみ下した）

という。これは儒学に於ける『春秋』観を、小説観に応用した論である。儋叟の小説観の根本にも、ここにいう「史之余」と見ることが深く存在した。同書に儋叟の「読俗文三条」が付してあるが、訓訳に関する一条をのぞけば、小説を読むに歴史の知識を必要とすること、作品の全旨を洞察して、文面の外に作者の深義、奥旨を知るべしとの二条となる。これは共に、「史之余」の考えに発する。

とされ、「歴史的事実が、小説の素材となつてものを発見するのが、小説鑑賞の第一の要諦」であり、その考え方は、「今日の出典考と同じ考えで、出典を史書史実に求めて、それを小説化した処に、作者の深義を求めべし」という考えにつながると述べられている。

一方、徳田武氏は、「読本論」³⁾で、『磐石伝』中の「草史氏云」「情史氏云」「稗史氏曰」といった書き出しで始まる議論や考証は、司馬遷の『史記』中の「太史公曰」といった論讚様式を取り入れたものだ、庭鐘が論讚を導入した意味について次のように述べられている。

論讚によつて、筆者は史上の人物・事件をあらゆる角度から存分に料理し、あらゆる文辞をもつて批評できるわけであ

る。すなわち、史上の人物を対象にして伝を立てるとき、庭鐘が世評を反駁していることに見られるように、従来の史観には縛られない、作者独自の史観を開陳できる契機を、論讚は与えてくれるのである。『史記』の論讚の形式を導入したのは、まさにこの利点を得んがためであった。

『史記』が「正史」であることにに対し、『磬石伝』は異端の史書、すなわち歴史における人物の運命・事柄の結果を、自分の納得がいく方向に向けて改変し、捏造しようとした「野乘」として著されたとされる。また、庭鐘にとって「小説とは（中略）史上の人物や事件を素材とし、正史や定論などにとらわれない自己の史観をもつてそれを批評し、史実を虚構化して叙述するもの」であるとも述べられている。

『磬石伝』の「草史氏云」「情史氏云」「稗史氏曰」や、跋「往にしますら雄の、いさほしありてうつもれたるを發明せるわざは、忠なるひとのかざしなるへきか。此御国の中ころは、史ならぬ桑門隠逸の己々が心の向ふにまかせ、私の筆添たるもお、し。其虚ほめを抑へ冤屈を伸しなむ作業は、古人も心さす所ありし」という一節より、『磬石伝』の主要なモチーフは「功績がありながら、不幸、史上に挫折し、埋没した人物を顕彰し、その冤屈を晴らし、鎮魂すること」、すなわち「虚構による歴史の欠陥の是正」であるとされている。このような小説観を徳田氏は「史之余」と謂われているのである。

中村氏は「小説ハ史ノ余也」という考えに発する「小説を読むに歴史の知識を必要とすること」、「作品の全旨を洞察して、文面

の外に作者の深義、奥旨を知る」ことの二点を指摘されている。徳田氏も、『磬石伝』を「史之余」として読み解く立場は同じであり、両氏共に「小説ハ史ノ余也」という清田儋叟の発想に端を発している。

さて、『磬石伝』を「史之余」としてとらえる理由について、中村氏は次のように述べられている。

一に、庭鐘も小説を「史之余」と見ていたことは、『英草紙』の第五篇、「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」で、鎌倉時代の人々を、南北朝に生れ替らせる筋に於て、一々に史的評論を加えた処や、義経一代記の筋を立てた『磬石伝』で、「草子子曰」とか「情史子曰」とか称して、歴史的な穿鑿を付した処からも、十分に推察できる。『英草紙』の序で、「鄙言却て俗の微となり、これより義に本づき、義をす、むる事ありて」と説いたのも、「春秋」的な考えに基づくと見てよいであろう。『磬石伝』の跋には明瞭に「往にしますら雄の、いさほしありて、うつもれたるを發明せるわざは、忠なる人のかざしなるべきか、（中略）冤屈を伸しなむ作業は、古人も心さす所ありし」と、歴史を補う要素を小説が持っていることを述べている。

つまり、『英草紙』第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」で史的評論を加えたように、『磬石伝』でも歴史的穿鑿がなされているということと、『磬石伝』の跋に同内容のことが書いてある、という二つの点からである。

さて、本稿ではこれら『磐石伝』をめぐる「史之余」という問題について、具体的な本文の典拠を挙げることによって再検討を加えてみたい。

三 歴史的詮索

ここでは第一の理由である、『磐石伝』で『英草紙』と同様の歴史的穿鑿をされているという点について見ていくことにする。結論から言えば、『磐石伝』と『英草紙』の歴史的穿鑿は全く別の性格を有しているといわざるを得ない。

この『英草紙』は五巻五冊全九編の読本で寛延二年（一七四九）刊、内容は中国白話小説の翻案によって、読本の様式を創出した奇談集である。つまり『磐石伝』と同様に読本として分類されているが、『英草紙』と『磐石伝』の刊行の間には長い期間がある。『磐石伝』が刊行されたのは文化三年（一八〇六）である。庭鐘在世中の天明三年（一七八三）十二月十二日に出版許可を得ていたが、何らかの理由で出版されるまでに二十年以上の歳月を待たなければならなかった。つまり『英草紙』と『磐石伝』の刊行の間は六十年近くあり、実質的な執筆時期の差としても三十数年あったことになる。

『磐石伝』と、その三十年前の作品である『英草紙』を、無条件に並べてよいものであろうか。確かに第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」も『磐石伝』もどちらも源義経を題材として取り上げているが、三十年という歳月の中で庭鐘の作風が変わったとしたら、同じように考えることはできない。

庭鐘の場合、作風を考えていく際に重要になってくるのがその作品の出典である。なぜなら、庭鐘の作品は、全てではないが、出典をかなり意識して翻案されたものがみられるからである。

そこで三部作と呼ばれる庭鐘の一連の作品群について見ていこうと思う。三部作とは、すなわち『古今奇談英草紙』（寛延二年、一七四九）、『古今奇談繁野話』（明和三年、一七六六）、『古今奇談秀句冊』（天明六年、一七八六）を指す。これらの差異は『磐石伝』の作風や、それに関わる出典を考えていく際にヒントを与えてくれると考えられるからである。

三部作にはそれぞれ序が附されている。『繁野話』序では次のようになっている。

近路行者三十年前、国字小説数十種を戯作して茶話に代ゆ。
千里浪子其中に就て、英草紙九種を摘て書林に授たるは、
廿年に早なりぬ。

『秀句冊』の序には、

古今奇談三十種は、近路の翁延享の初に稿成たるを、頃に至りて其粹を数に充なむと計るよしを聞いて、むかしの春は英と虚称し、ふりぬる秋にはしげく荒ましかりて、尚其梢は況て如何にと予に聞へさずる。

とある。これらの言を信じるなら、三部作各九篇はほぼ同時期に完成していたということになる。しかし、作風が全体的に、『秀

句冊』の方が、前作の『繁野話』に比べて複雑になつており、また『英草紙』の論と思想を訂正したりしているので、同時期に書かれたとは考えにくい。とはいえ、三部作の庭鐘の位置づけがほぼ一致していることは、同じく『秀句冊』の序と『繁野話』の序から推測できる。

『繁野話』では、

其首なる雲のたちある談は、是をこそ一方の雲の賦と号べきか。守屋の連不言の裏に意ふかく、厩戸の理もよく展たり。手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ、邪色の人を蕩すことを寛す。白菊の巻は白猿梅嶺の旧趣を仮り、占卜の前数に因る事を説き、女教の名実全からんことをはげましむ。唐船の弥言は聚散の悲喜を尽し、望月の偶言に竜雷の表裏たるを断る。江口の始終は杜十娘を翻して、伎妓の偏性をかたり、子弟の戒となすなる。宇佐美宇津宮の戦略は軍機の得失頭らかに、南朝の絶ざる昔物語見ゆ。彼是九種、併に長談なりといへども、卑説臆談、名区山川、古老の伝聞、土人の口碑、此に述ずんば世に聞ゆまじきを、是が演義して、長き日の興にも備ふべし。

とある。また、『秀句冊』では、

求塚の後の巻には、三つの跡を俱に男となすを経とし、神代の事のしら糸に黏して緯をとり、蘇小狹娘の巧令を潤色となす。太間の池は今摂と河に分れ、堤築の衣子繩手あり、

人柱の雉子畔あり。岐路の為に枝を折る、吉野狸々は徐渭が四声猿を襲ひ、群る憤を南山の猿楽に漏すも、古人の辱に筆暢ざる所あり。

とある。これらの序文は次のように、各話の出典を明らかにしている。上段を三部作中のタイトル、下段を原話とすれば、

『繁野話』 ⁽⁵⁾	
第五篇 白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話	任氏伝—唐代小説及び人妻化成弓後成鳥飛失語—今昔物語卷三十
第八篇 江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話	陳從善梅嶺失渾家—古今小説卷二十
第三篇 紀の関守が靈弓一旦白鳥に化する話	杜十娘怒沈白宝箱—警世通言卷三十二
『秀句冊』	
第六篇 吉野狸々人間に遊て歌舞を伝る話	蘇小妹三難新郎—今古奇観卷十七及び日本書紀卷十三
第五篇 絶間池の演義強頭の勇衣子の智ありし話	日本書紀卷十一 ⁽⁶⁾

である。太刀川氏は、『繁野話』序の「繫ぎ」、「仮り」、「翻して」という三つの言葉の違いについて考察しているが、広い意味ととらえれば、これらのことは、「その教養に基づいた中国的なものを作品の中にそのまま取り入れようとした」といえるのではないだろうか。

このことは、『英草紙』の第一編「後醍醐の帝藤房の諫を折く話」(『警世通言』「王安石三難蘇學士」^⑩)、第二編「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」(『古今小説』及び『今古奇観』「金玉奴棒打薄情郎」)、第三編「豊原兼秋音を聴きて国の盛衰を知る話」(『警世通言』及び『今古奇観』「兪伯牙摔琴謝知音」)、第四編「黒川源太主山に入つて道を得たる話」(『警世通言』及び『今古奇観』「莊子休鼓盆成大道」)、第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」(『古今小説』「闇陰司司馬貌断獄」)、第八編「白水翁が売卜直言奇を示す話」(『警世通言』「三現身包竜凶断冤」)、第九編「高武藏守婢を出だして媒をなす話」(『古今小説』及び『今古奇観』「裴晋公義還原配」)、という具合の中国典拠の利用からもわかる。

このように、庭鐘の作品は『英草紙』『繁野話』『秀句冊』と時代が下るにつれて減つていくとはいえず、中国の白話小説を典拠とし、それを日本風にアレンジするという翻案方法をとっていた。また、時代が後になるほど典拠のはっきりしない作品が増えていくということは、とりもなおさず庭鐘の作風の変化であり、『警

石伝』の作風に大きく関係してくるはずである。

四 『英草紙』第五編の検討

『英草紙』の序にはその出典は明らかにされてはいない。しかし、先人たちの研究によって前に挙げたようにほぼ明らかになっている。そこで、これをベースにしつつ、『英草紙』第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」(以下「紀任重」)について考えていきたい。

「紀任重」のあらすじは次の通りである。

弘安年中後宇多天皇のときに、紀任重という者がいた。生まれつき聡明であったが、家は貧しかった。このような世の中を憤っていた任重は、ある夜、天に対して怒りの詩歌を詠む。その夜、任重は夢の中で半日闇魔王になって、百年來の訴訟を行うことになる。後鳥羽天皇の時代から決着できない三通の訴訟事件とは、幼児をだまして、入水死に至らしめた件(原告：安徳天皇、被告：平清盛の妻二位の尼)、手柄を賞しないでかえって兄弟を死傷した件(原告：源範頼・義経、被告：源頼朝・その臣大江広元)、手柄あった臣を嫌い一家断絶させた件(原告：畠山重忠、被告：北条時政・その娘政子)であった。任重は以下のような決断を下した。安徳天皇は公卿阿野公廉の娘廉子となって天皇の寵愛を受ける。二位の尼は公卿西園寺実兼の娘として生まれ、女御となり妃になるはずが、廉子にその座を奪われる。義経は新田義貞に生まれ変わり天

下二分の勢力を持つが、前世の陰徳をなくす行為のため、最期は殺されてしまう。範頼は楠正成となつて新田義貞とともに天皇親政の世にするが、義経を逆恨みしていた前世の因縁により義貞のもとで命令を聞き続けなければならない。畠山重忠は文武両道に優れ、全く罪がないので、軍師江田源三の生まれ変わり足利直義と同腹の兄弟高氏として生まれ変わり、天下を統一して將軍となる。義経が驕慢な性格になる原因をつくつた占いをした吉岡鬼一は高師直として生まれ変わり、四十一歳で自害する。北条時政は再び北条家に入り高時と名乗つて鎌倉で滅ぼされる。政子は後醍醐天皇に宮仕えして民部卿の局と呼ばれ、大塔宮を生むが、大塔宮が直義に殺された後は悲しみの中で亡くなる。大江広元は赤松家に生まれ、法号を円心と名乗る。楠について官軍への功は大きいが賞せられない。頼朝は皇子として生れながら、比叡山に登り天台座主となる。その後俗人となり護良と名乗り、様々な艱難辛苦の後征夷大將軍になるが、最期は直義の命令で首を斬られる。これらすべてをちようど十二時間で解決した任重は来世では新田義貞の弟脇屋義介と名乗り、南朝の土台をなす臣となされることが約束される。閻魔王と別れた任重は夢の中でできごとを全て忘れず、そのことを隣の老人に語つて聞かせた後、玉帝の命令があるから、と瞑目して死んでしまう。

いずれも高い連関性を持ち、第一・第二・第三の訴訟をそれぞれ区切るべきではないのかもしれないが、ここでは義経に対しての史的評論について見ていくので、第二の訴訟について考えてい

きたい。

任重はまず、義経が訴えるのにはそれなりに筋が通っているが、兄弟の礼を守らなかつたこと、頼朝に謝罪をするどころか使いの土佐正俊を斬つて謀叛の心を表したために、最期は辺境の地で迎えることになつたと言う。義経は、飽くまで自分が失墜したのは讒者と、狭量な兄のためであると主張する。そこで任重は義経の軍師であつた江田源三を呼び寄せ、義経のもとを去つた理由を問いただす。すると、義経は実は性格はせつかちで、親しい人は少なく、自負驕慢のくせがあるため、信頼や尊敬を寄せる人が少なかつたことがわかる。また、度々の源三の諫言にもまかつく耳を貸さなかつたことも判明する。義経がこのような性格になつたのは、鬼一法眼の占いによつて、七十一歳まで生き、高貴と榮譽を得て生涯を終わると診断されたからであると反論する。鬼一は、義経の寿命が縮まつたのは四つの罪によつて、それぞれ十年ずつ寿命を削られていったのだと言う。また任重は大江広元を呼び寄せ問いただすと、義経を排斥したのは頼朝のためであり、天下のためでもあつたからだと言う。任重は、義経が追われることになつたのは結局は頼朝のためであるので、転生後その恨みを晴らすことにする。

庭鐘の立場が義経擁護なのか否かかといえ、擁護派と考えられよう。それは、義経が追われたのは頼朝のためであり、功がありながらもそれが認められなかつたということに起因する。無条件に「判官びいき」を受け入れてはいない。

しかし、

大部分をなすのは、原話の『漢楚軍談』の人物を『三国志演義』の人物に転生させるに對して、『源平盛衰記』や『東鑑』の人物を『太平記』の人物に生まれ変わらせるそのからくりと理論で、そこに本編の興味の中心がある。からくりのほうは原話によるところが多い。そこには一種の見立てのおもしろさがある。『源平盛衰記』の人物を『太平記』に転生させるのも、また一種の見立てである。

と中村氏も述べられているように、この話は「見立て」によって、白話小説を翻案することに最も力が注がれていたと考えられる。とするならば、そこに描かれるものが、たとえ自分の考えと相反するものであったとしても、それを曲げてでも作品の合理性を優先するのではないだろうか。

だから、庭鐘が義経擁護派か否かという問は、「紀任重」について見ていく場合、わからないと答えるのが妥当かもしれない。三宅正彦氏は原拠と言われている『古今小説』「關陰司司馬貌断獄」と「紀任重」との共通点と相違点を指摘されている。それによれば、義経に当たる人物は韓信である。功ありながら、呂后や蕭何に謀殺された韓信が、軍師蒯通に見捨てられたこと、占師許復にその寿命三十二歳を七十二歳と古い誤られたことなど、まさに「紀任重」における義経そのものであるといえる。

しかし、山口剛氏が、

けれど見のがしてならないのは、庭鐘が史論をなす時には、よし輪郭を原話に借りるにしても、中に独自の見を寄するの

が多い。

と述べられているように、この作品では翻案が全てに優先されているのであるが、かといって全く持論を展開していないとも言えない。それは、義経が高氏と鎌倉を滅ぼすも、その最期がよくない新田義貞に転生するだけに過ぎないのに対し、韓信が生前の功勞によって、魏・呉・蜀の三国中、最も強大な魏の曹操に転生されることからわかる。

つまり「紀任重」は、庭鐘の史的穿鑿がないではないが、その主題は飽くまでも「關陰司司馬貌断獄」を翻案することであつたといえよう。

では、『磐石伝』ではどうであつたのだろうか。『磐石伝』が成立したのは天明三年、あるいはそれ以前であるので、三部作の中では、天明六年の『笏句冊』に最も近い。しかし前出の表を見ると、『笏句冊』全九編のうち、わずかに三編のみに明確な典拠が存在し、しかもうち二編は中国の作品ではない『日本書紀』が関わっている。つまり、山口氏が述べられたように、『英草紙』『纂野話』『笏句冊』と著を重ねるに従つて、より独自の史論を述べるようになってきたということが言えそうである。

五 『磐石伝』の典拠

作家としての立場がはっきりと変化した庭鐘は、どのようにな『磐石伝』を作つていったのだろうか。次に示したのは、『磐石伝』の各話の題とその出典と考えられる書である。

各話の題	<p>出典と考えられる書</p>
<p>一 常磐鏡石に子を祈る。 鱗児を単閼に育する事</p>	<p>・『保元』中「関白殿本官に帰復し給ふ事」 ・『平治』下「経宗・惟方遠流に処せらるる事同じく召しかえさるる事」 ・『平家』八「名虎」</p>
<p>二 売石叟難婦を護送す。 細幼龍門に躲る事</p>	<p>・『平治』上「信頼信西を亡ぼさるる議の事」、「三条殿へ発向付たり信西の宿所焼き払う事」、「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」、「主上六波羅へ行幸の事」、「源氏勢汰への事」、中「待賢門の軍の事付たり信頼落つる事」、「六波羅合戦の事」、「義朝奥波賀に落ち著く事」、「義朝内海下向の事付けたりと忠致心替りの事」、「悪源太誅せらるる事」、下「頼朝捕らるる事付けたり夜叉御前の事」、「常葉落ちらるる事」</p>
<p>三 難婦自己像を造る。 将雛各網籠を脱る事</p>	<p>・『平治』下「常葉六波羅に参る事」、「頼朝遠流に宥めらるる事付けたり只越戦ひの事」</p>
<p>四 常磐主を換て事る。</p>	<p>・『多気窓螢』下「安のの愛染の事」 ・『義経記』一「牛若鞍馬入の事」、「吉</p>

<p>藤源氏混姓の雑談ある事</p>	<p>次が奥州物語の事」 ・古活字本『平治』下「牛若奥州下りの事」 ・謡曲「一角仙人」</p>
<p>五 晋の羊后兩國に皇后と為る事</p>	<p>・『晋書』五「孝懷帝」、三十一「惠羊皇后」、百「王彌」、百一「劉聰 子粲」、百三「劉曜」</p>
<p>六 入内の賀使私に語る。 常磐立后より御産を参りし事</p>	<p>・『愚管抄』五 ・『平家』三「御産」六「小督」、「入道死去」 ・『盛衰記』十「中宮御産事」、十二「安德天皇御位事」、二十六「入道得病 附平家可亡夢事」</p>
<p>七 頼政桑道を責る。 義経参陣頼政を翼る事</p>	<p>・『盛衰記』十四「木下馬事」、「小松大臣情事」、三十一「木曾登山^附勢多軍事」、「鞍馬御幸事」、「平家都落事」、三十三「木曾洛中狼藉事」、「平氏著屋島事」、「源平水島軍事」、「行家与平氏」室山合戦事」、三十四「木曾可追討」由附木曾怠状拳「山門」事、「範頼義経上洛^附頼朝遣山門牒状」事」、三十五「義経院参事」、三十六「一谷城構事」、「義経向三草山」事、「平氏嫌」手向^附通</p>

盛請「小宰相局」事、三十七「熊谷父子寄」城戸口並平山同所來附成田來事、「平家開」城戸口並源平侍合戰事、「義経落」鶴越並畠山荷附馬因縁事、「一谷落城」重衡卿虜事、「一則綱討」盛俊「事」、「忠度通盛等最後事」、三十八「知盛遁」戰場「乗」船事、「平家公達最後」頸共掛「一谷」事、四十一「屋島八月十五夜」範頼西海道下向事、「義経拝賀御禊供奉」実平自「西海」飛脚事、「義経院參西国発向」三社諸寺祈禱事、「平家人々歎」梶原逆櫓事、四十二「勝浦合戰」勝磨「親家屋島尋承事」、「屋島合戰」玉蟲立「扇与一射」扇事、「源平侍共軍」繼信盛政孝養事、四十三「源平侍遠矢」成良返忠事、「知盛船掃除」占「海鹿」並宗盛取替子事、「二位禪尼入海」平家亡虜人々附京都注進事「平家」四「競」、七「主上都落」、八「鼓判官」、「太宰府落」、「水島合戰」、「室山」、九「河原合戰」、「樋口被討罰」、「三草合戰」、「老馬」、「一二之懸」、「二度之懸」、「坂落」、
 ・『多気窓螢』下「頼政が使の事」

<p>八 先の太后剃髮幽棲す。六道物語虚妄といふ評</p>	<p>・『平治』上「主上六波羅へ行幸の事」、 「源氏勢汰への事」</p>
<p>九 平族歌道に深き評あり。源三義経の冤を断する事</p>	<p>・『盛衰記』四十一「平家人々歎附梶原逆櫓事」、四十三「二位禪尼入海」並平家亡虜人々<small>附</small>京都注進事 ・『古事記』上「草薙劍」</p>
<p>十 義経都在判する。畠山梶原気性異なる事</p>	<p>・『吾妻鏡』二、四 ・『盛衰記』四十五「源氏等受領附義経任」二伊予守「事」 ・古活字本『平治』下「牛若奥州下りの事」</p>
<p>十一 弁慶後乗を勉む。売石叟正純を</p>	<p>・『盛衰記』四十六「土佐房上洛事」 ・『吾妻鏡』五 ・『平家』一「禿髮」</p>

<p>捕る事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『義経記』四「土佐坊義経の討手に上る事」
<p>十二 漢の韓信大功有て讒言を被し事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『史記』九十二「淮陰侯」
<p>十三 陽に大洲の波に、赴き隠て吉野の雪に埋る事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『盛衰記』三十三「大神宮勅使<small>附</small>緒方三郎責平家」、四十一「平家人々歎附梶原逆櫓事」、四十六「義経行家出都並義経始終有様事」、 ・『五畿内志』下「撰津志」 ・『義経記』四「住吉大物二か所合戦の事」、五「忠信吉野に止まる事」
<p>十四 西行奇に忠信を扶け、布裙隊に尤物を認る事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『義経記』五「忠信吉野山の合戦の事」、 「判官吉野山に入り給ふ事」、六「静鎌倉へ下る事」、 「静若宮八幡宮へ参詣の事」 ・『吾妻鏡』五、六 ・『和州旧跡幽考』十一「吉野郡」
<p>十五 有綱戦で判官の憤を吐。大石辟て判官を救ふ事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『盛衰記』四十六「義経行家出都<small>並</small>義経始終有様事」 ・『吾妻鏡』五、六、十一 ・『義経記』五「忠信吉野に止まる事」、 六「忠信最期の事」

<p>十六 売石叟保て関を脱る。 判官奥に入秀衡没後の事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・古活字本『平治物語』下「牛若奥州下の事」 ・『雍州府志』八「古跡門」 ・『吾妻鏡』三、五、六、七、九、十 ・『義経記』七「判官北国落の事」、 「平泉寺御見物の事」 ・『平泉実記』一「源義経最期<small>並</small>秀衡病死」、 二「頼朝卿出陣」、 「阿津賀志合戦」、 「国衡最期」、 三「平泉炎上」 「泰衡落文<small>並</small>最期」、 五「助公法師和歌」、 「大河二郎兼任反逆」、 「兼任合戦」 ・未詳
<p>十七 小柴の客店に同志語。 判官志を得て赤光を視す事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・未詳
<p>十八 楮造の像に怪有岩冢に鎮す。義経末国に至て胡王と成る事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・未詳

第十七篇、十八篇は庭鐘自身も「末二段は余話にて」（十六「売石叟保て関を脱る。判官奥に入秀衡没後の事」と述べており、出典と考えられるものも見つかからないので、未詳としておく。

このように見てきたところ、出典と考えられるものの多くは『平治物語』、『保元物語』、『平家物語』、『源平盛衰記』、『義経記』などの軍記物語、『吾妻鏡』などの史書が多いことがわかる。

『磐石伝』では本文の後に「草史氏云」、「稗史氏曰」、「情史氏云」といった形で評が加えられている。中村氏のいう「歴史的な穿鑿」とはこの本文の後の評のことをいう。

まずここに「紀任重」と『磐石伝』に大きな違いがある。「紀任重」では白話小説を我が国の内容に置き換えつつ、本文の中で史論を試みているが、『磐石伝』では本文の中には殆ど庭鐘の持論は登場せず、ほぼ全部の史的評論は本文の後の評の部分に委ねられているということである。

例えば、第十七篇、十八篇は義経の異国での活躍が暗示、あるいは描写されているところであるが、第十六篇の評には次のように書いてある。

義経西に転蓬て元の太祖を助るといふ説、金元史の中にて、出所異国の人とあるに目を付て見れば、それかれと符合するやうに思はるれど、其比家を失ひ、本朝より外国に逃るゝ人何ぞ二三にとゞまらんや。(中略) ○判官平治元年に生れ、文治五年に亡ぬす。其間三十二年の事に繫たり。時に常磐五十四歳なり。末二段は余話にて年数しるすべからず。

このように、最後の二段はフィクションであり、義経が異国に渡って活躍したことには史実としての証拠がないことを明確に述

べている。

では本文の方はどうか。卷五上第十四篇「西行奇に忠信を扶け、布裙隊に尤物を認る事」に次のような文がある。

閏七月、静安産の男子、安達新三郎承て、由比が浜に捨埋む。

これは、『吾妻鏡』第六文治二年閏七月の条の

廿九日 庚戌 静男子を産生す。これ予州の息男なり。件の期を待たるるによつて、今に帰洛を抑留せらるるところなり。しかるにその父関東を背きたてまつり、謀逆を企て逐電す。その子もし女子たらば、早く母に給ふべし。男子たるにおいては、今襦袢の内にあるといへども、いかでか将来を怖畏せざらんや。未熟の時命を断つ條、よろしかるべきの由治定す。よつて今日、安達新三郎に仰せて、由比の浦に棄てしむ。これより先、新三郎御使として、かの赤子を請け取らんと欲す。静敢へてこれを出さず、衣に纏ひて抱き臥し、叫喚数剋に及ぶの間、安達しきりに譴責す。磯禪師殊に恐れ申し、赤子を押し取りて御使に与ふ。

という記事によるものと思われる。これだけの内容を、『磐石伝』ではわずか一行に凝縮されてしまっている。『磐石伝』ではこのような部分が多々見られる。

静が妊娠していたことは、それより以前に、

もとより妓妾の身の上なれば、禁固せらるへきにもあらねど、当時懐妊す。義経の子息なるべければ、生産の後返し遣はさるへきおほせなり。(巻五上第十四篇「西行奇に忠信を扶け、布裙隊に尤物を認る事」)

とあるのでわかるのであるが、その子供が女子であったならば助かったであろうこと、その時の静の悲しみは全く触れられていない。ストーリーが進行する上ではあまり関係はない。しかし、跋

人情の変わり移るは其時にあたりてはかり知べきにあらねども、事に臨みて逼りたる心さまは思ひやるちまた外なるましく、それを文の言葉に伝えて、朽ざらしむるためしも少なからざるに似たり。

とあるように、その時ごとの人情は簡単には推し量ることはできないが、切迫した時の人情は知ることができる、それを描いたのが『磐石伝』であるとするならば、『吾妻鏡』にあるような静の悲しみは描かれるべきである。それが描かれていないのは、中村氏が「小説を読むに歴史の知識を必要とする」と述べているように、『磐石伝』を読むには、『源平盛衰記』や『吾妻鏡』などから得た歴史的知識を持つていことが前提である、と庭鐘は考えていたのではないだろうか。行間を読む、という表現があるが、まさに庭鐘の『磐石伝』は、そのように読むことを読者に課した作品だと見ることができるのである。

また、巻四第十二篇「漢の韓信大功有て讒言を被し事」では、次のようにある。

漢の天下を並すは韓信か力なり。高祖其兵を奪ふこと再び、齊王を奪て楚にうつし、楚王を奪て淮陰侯となすまで、韓信只吾は漢に功あれば、漢我に負じと思ひ究めて、君能を忌とばかり思ひて疑はず。陳豨は旧知にもあらず。何ぞ心をゆるして大事をかたらはん。又なんぞ舍人に知らしめん。又実情に同謀ならば、豨が軍の破れをしらずして、何ぞ姦婦の手にか、らん。昔より功多き者を忌人多きは、軍將のみならず。帝謀臣に問計に、陳平は模稜の人、何ぞ言に足らん。張良、蕭何、信が反を実証すべきに非ざれども、若異心あらば、小可の人ならずと、其器量を畏れ、俱に擒るの計を進て信を護するものなし。韓信実に叛逆せず。是千古の憤る所なり。今義経の身の上も是に類して憐なり。

「今義経の身の上も是に類して」とあるように、義経と韓信を重ね合わせる観点は、すでに『英草紙』のときからあった。しかし、庭鐘は「紀任重」とは異なり、第十一篇「漢の韓信大功有て讒言を被し事」を『磐石伝』中にさしはさんだだけであった。

これがいったい何を意味するのか。おそらく、ここでは史書等に基づいた史実、つまり素材だけを読者に与え、それをどう読むかということを読者に委ねたのではないかと思う。『磐石伝』の本文が全体に平板な文章であり、庭鐘の義経観は各話の最後の評に凝縮されているのもおそらくこのことと関係あるのだろう。

ここまで見てきたように、『英草紙』と『磬石伝』の歴史的穿鑿は大きく異なっている。『英草紙』の史的評論は飽くまで「闇陰司馬貌断獄」をベースとしたものであって、そこから抜け出した庭鐘の意見はほとんど添えられなかった。一方、『磬石伝』では、本文にはほとんど作者の視点は現われておらず、評に作者独自の見方が凝縮されている。そして史的評論のない本文は、歴史的な知識を必要としながらも、読者に行間を読ませるように要求するような文章であると考えることが出来る。

原典に縛られず、また読者を縛らないためにも、庭鐘は三十数年間のうちにこのように作風を変えていったのであった。

六 『義経磬石伝』と「史之余」

次に、中村幸彦氏が『磬石伝』を「史之余」としてみる第二の理由について考えていきたいと思う。中村氏の考える第二の理由とは、『磬石伝』の跋の内容が「史之余」という考え方に合致しているということであった。

まず『磬石伝』の跋に次のようにある。

往にしますら雄の、いさほしありてうつもれたるを發明せる
わざは、忠なる人のかざしなるへきか。此御国の中ころは、
史ならぬ桑門隱逸の己々が心の向ふにまかせ、私の筆添たる
もお、し。其虚ほめを抑へ冤屈を伸しなむ作業は、古人も
心さす所ありし。

この意味するところは、徳田武氏の「読本論」⁽³⁾では、「功績がありながら、不幸、史上に挫折し、埋没した人物を顕彰し、その冤屈を晴らし、鎮魂すること」とされておられ、それが『磬石伝』の「主要なモチーフ」であると述べられている。

確かに『義経磬石伝』と銘打った以上、わざわざ義経を貶めるようなストーリーが展開されるはずはないと考えるのが普通である。しかし、この部分だけで、『磬石伝』の主要なモチーフを義経の顕彰・鎮魂と判断するのは聊か早計に過ぎはしないか。

今、『磬石伝』跋を改めて文字通り解釈してみる。すると、「史ならぬ桑門隱逸の己々が心の向ふにまかせ、私の筆添たるもお、し。其虚ほめを抑へ冤屈を伸しなむ作業」とは、歴史をわきまえぬ僧や隠者たちによって私的に作られた作品の虚構を取り去る、ということを行っていることがわかる。

また、「史ならぬ桑門隱逸の己々が心の向ふにまかせ、私の筆添たる」が具体的には何を指しているのかを示す評が、巻三第八篇「先の太后剃髮幽棲す。六道物語虚妄といふ評」にある。

彼宗盛義経に密通の説は、六道物語りの自首を主としていふ
ことなり。盛衰琵琶法師共に仏者の加筆にて、かゝる事は
人道の与る所重く、貴人には国に諱べき事なるを、人道を
頓着せぬを趣意として、光明皇后の行跡を、仏権に繋て
事も無げに書たるは、僧徒の濫りなるを故あることのやうに
取なすや。古昔宮中の事は下民の耳に疑しきこともあるへき
を、記さで事闕まじきは漏すことおほかり。幼主を宗盛の子

と私言するも、追討使の罪うすく文なすにや。義経とても放蕩たる言の折からも有べし。巻尾に祝事は記さで、六道を説事、仏説に留る手段なり。小原御幸の紀を記すは、物語りの体なり。女院の法皇への恨み始終も、懸河の如く、告状の如く究め過たるものなり。上皇も中冓の事を畜生道に因て、家翁子婦の間に尋問窮め給ふこと、いかに雑礼のいたり、家門の恥辱を捨給ふ事有ましく、人これをかたるとも聞ざるが如くましますべし。女院も畜生道を説に、いかめしく我身の恥を証拠となし給はんより、まさしき事も包みしのび給ふこそ、恥を知る教にも叶ふべし。表あれば裏も存する事、仏の戒律の目ばかりを守る法脈もあるに、意持ある僧が世の礼楽を乱り、人道を末とする所、勿論史の筆にもあらず。宗盛義経世に無なりてこそ、此乱言も添たるべし。

「仏者の加筆にて」とあることより、「盛衰」は『源平盛衰記』、「琵琶法師」は『平家物語』を指すものだと考えられる。庭鐘は僧に対してかなり批判的であり、「表あれば裏も存する事、仏の戒律の目ばかりを守る法脈もあるに、意持ある僧が世の礼楽を乱り、人道を末とする所、勿論史の筆にもあらず」という言葉は跋の「史ならぬ桑門隠逸の己々が心の向ふにまかせ、私の筆添たるもお、し」ということを表していると考えられる。つまり、『盛衰記』や『平家』というのは、仏教の戒律ばかりを固守して、人道が優先されれば決して書かれない部分を、僧たちが自分勝手に書き散らした書である、と庭鐘が考えているらしいということがわかる。

以上の点より考えると、徳田氏の解釈は跋そのものの解釈というより、作品名から受けるイメージからかなり影響を受けてしまっているように思う。そして、本文を読んでみると、どちらかといえば、庭鐘は義経を顕彰しているようにも、冤屈を晴らし、鎮魂しているようにも思えないのである。

ともあれ、今は庭鐘の言葉どおり「冤屈を伸」ただけではなく、「虚ほめを抑へ」たものが『磐石伝』であると考えることにする。では次に、どのような点が「虚ほめを抑へ」たものであり、「冤屈を伸」ばしたものであるのか、ということについて考えていきたい。

『盛衰記』や『平家』を批判的にとらえている庭鐘の姿勢は、当然『磐石伝』にも色濃く反映されている。『盛衰記』や『平家』では義経の平家追討にかなり紙面を割いているわけであるが、第一節の『磐石伝』の各篇のあらずじを参照すると、義経が活躍の場を得ているのは、全十八篇の中でわずかに第七篇、十篇、十七篇、十八篇にすぎないのである。このことは、庭鐘が『盛衰記』や『平家』の義経についての記述を全面的には受け入れることができなかつたことを示しているのではないだろうか。

庭鐘が『盛衰記』や『平家』に批判的であることは先に確認した。では義経を主人公とした代表的な作品である『義経記』について、どのような見解を持っていたのだろうか。

庭鐘は『義経記』について、『磐石伝』第九篇「平族歌道に深き評あり。源三義経の冤を断する事」で、以下のように述べている。

○義経記は文章よく筆にまかせてはづみたる物にて、しかも古き草紙なり。堀川夜うちの弁慶がたはふれ、関こゆる道中の名をつくしたる詞も古雅に物かたりの体にて、見ずばをしき草紙なり。いかに肝要の軍功、一の谷の八島を記せざる。元はしるしたるを、琵琶法師にゆづりてのぞきたるやといふ。

「見ずばをしき草紙」と言っていることからわかるように、庭鐘は『義経記』に対して好印象を持っていることがわかる。逆に『盛衰記』や『平家』に批判的な庭鐘が、第七篇であえて一の谷や八島での活躍を『源平盛衰記』等を参考にして記述しているのは、それが「其虚ほめを抑へ冤屈を伸しなむ作業」であると考えていたからではないだろうか。

『磐石伝』第七篇に、

是に因て二年正月十日、九郎義経発向す。平家は八島を城郭とし、知盛は長門のひこ嶋を陣所とし、其勢九国を率てこ、を固めたり

とある。この記述はおそらく『盛衰記』の、

元暦二年正月十日、九郎大夫判官義経は、平家追討の為西国へ発向す。(巻四十一「義経院参西国発向附三社諸寺祈祷事」)
平家は又屋島を以て城郭とし、彦島を以軍の陣とす。前中納言知盛卿、九国の兵を率して門字の関を固たり。(巻四十一「平家人々歎附梶原逆槽事」)

という部分をほぼそのまま使っていると思われる。

では『吾妻鏡』ではどうか。巻四元暦二年二月十六日の条に、
関東の軍兵、平氏を追討せんがために、讃岐国に赴く。延尉義経先陣たり。(中略)平家は陣を両所に結ぶ。前内府は、讃岐国屋島をもつて城郭となし、新中納言知盛は、九国の官兵を相具して門司の関を固め、彦島をもつて當と定め、追討使を相待つと云々

とある。

庭鐘が『盛衰記』や『平家』を史実の拠り所としていなかったであろうことは「史ならぬ桑門隱逸の己々が心の向ふにまかせ」という部分からも明らかである。では、庭鐘は『吾妻鏡』をどのようにとらえていたのだろうか。

『磐石伝』第十一篇に、

按に、大氏東鑑は都の虚説を泄さず書記し、虚実ともに鎌倉の聞耳よく申伝へ書注む。平家盛衰記等は、鎌倉の事は一向知らざる趣もありて年月遅速異同多し

とある。この一節は庭鐘が『吾妻鏡』を信頼しうる史書の一つと見なしていた、と見ることができそうである。ただ一つ気になるのは、庭鐘が『磐石伝』第七篇で、何故『吾妻鏡』ではなく、『年月の遅速』の「異同」が多い『盛衰記』の日付を採用したか

ということである。『吾妻鏡』を史実として考えていたならば、『磐石伝』の日付は元暦二年二月十六日となるはずであるが、実際は『盛衰記』と同じ元暦二年正月十日となっている。このことは、庭鐘が『磐石伝』で何を言わんとしたかということに大きく関わってくるように思う。

先に確認したように、『磐石伝』跋には、「其虚ほめを抑へ冤屈を伸しなむ作業」という言葉がある。これを『磐石伝』の「主要なモチーフ」と見るならば、そのモチーフとは、義経について顕彰すべきところはしつつ、過大評価されているところは抑える、ということになる。

義経の「冤屈」とは、平家討伐の軍功であり、「虚ほめ」とは、判官びいきから一人歩きしてしまったその伝説にほかならない。つまり、『磐石伝』では、これらのことをありのままに、できるだけ史実に沿って語ることが目指されたのではないかと考えられるわけである。

七 『磐石伝』の日付

史実を示す材料として、作品中の日付は非常に大きな意味を持つと考えられる。そこで、次に『磐石伝』に明記されている日付が『盛衰記』等の軍記物語によるのか、『吾妻鏡』等の史書によるのかを見ていきたいと思う。

以下の表は、『磐石伝』中に明記されている日付を抽出し、並べたものである。よって、日付の書かれていない出来事については全て省略してある。

卷六上第十六篇の評に「末二段は余話にて年数しるべからず」とあることから、第十七篇、十八篇は出典となるべきものがない、あるいははっきりと年月を示す書がないことを示していると考えられる。この二篇を除くと、義経の隆盛期と考えられる部分には軍記物語が使われていることがわかる。例えば、第八篇で建礼門院が六十八歳で貞応三年に亡くなるという記述は、『盛衰記』にしか見られない。

義経の隆盛期を描くとき、その素材となる作品は『盛衰記』や『平家』である。なぜなら、義経の一代記を描いた『義経記』には、庭鐘も「元はしるしたるを、琵琶法師にゆづりてのぞきたるやといふ」と述べているようにその栄光が描かれていないからである。

前述したように、義経の平家討伐は紛れもない事実である。もちろん、そのことは『吾妻鏡』等の史書にも描かれている。しかし、『吾妻鏡』は「都の虚説を泄さず書記し」たものであり、史実ばかりを記したのではないことを庭鐘は認めているのである。ありのままに描くことを目指しながらも、その素材となるべき作品には虚実が入り乱れている。「義経」というテーマを選んだそのときから、大きな矛盾を抱え込んでいたのが、この『磐石伝』であるとも考えられる。

『磐石伝』中の 日付	出来事	軍記物語の日付	歴史書の日付
【第一篇】 平治3・12・4 9 25 26 27 29 平治4・1・3 5 仁安3 【第六篇】 承安元 治承2・11・11 治承5・2・25 閏2・4	平清盛、重盛を連れて熊野参詣 藤原信頼、源義朝を遣わして院の御所を攻め、藤原信西を殺害 清盛、都に帰る 天皇、女官の服を着て六波羅へ行幸 重盛、陽明門、待賢門、郁芳門へ押し寄せ、義朝東国へ逃れる 義朝、美濃大墓に着く。二男朝長、傷が癒えず自殺する 内海の長田、義朝を裏切り殺害 常磐、義朝の死を聞き、臥見の旧知のもとへ向かう 高倉院、即位 清盛の娘得子(徳子)、入内 中宮、産気づく 入道(清盛)、熱病にかかる	平治元・12・4 9 25 26 27 28 平治4・1・3 2・9 (古平治) 仁安3・3・20 (盛衰) (平家) 治承2・11・12 (盛衰) (平家) 治承5・2・28 (盛衰) (平家) 閏2・4 (盛衰) (平家)	仁安3 (愚管) 承安元・12・14 (愚管) 治承5・2・25 (吾妻) 閏2・4 (吾妻)

<p>【第七篇】 治承4 《治承3 寿永2 元暦元・2 元暦2・1・10 3・24 【第八篇】 文治2・2・上旬</p>	<p>入道、死去 以仁王、平家追討の令旨を出す 平重盛、死去 木曾義仲、京都に攻上り、平家、天皇を奉じて西海へ逃れる 義仲追討後、義経、三草山を攻める 義経、平家追討のため、西国へ発向する 安徳天皇入水 後白河法皇、大原御幸</p>	<p>文治3・9 《建久2 《承久3 貞応3</p>	<p>後鳥羽院、隠岐に配流</p>
<p>貞応3 建久3・3・13 承久3 貞応3・春 建久2・2・中旬 (平家)</p>	<p>建礼門院の庵に盗賊が入る 後白河院、崩御 後鳥羽院、隠岐に配流</p>	<p>治承4・4・9 (盛衰) 寿永2・7 (盛衰) 元暦元・2・4 (盛衰) 元暦2・1・10 (盛衰) 2・3 (平家) 3・末 (盛衰) 文治2・2・上旬を予定するが、実際は4・末 (盛衰) 4・20過ぎ (平家)</p>	<p>治承4・4・9 (吾妻) 治承3・8・朔日(愚管) 寿永2・7 (吾妻) 元暦元・1・29 (吾妻) 元暦2・2・16 (吾妻) 3・24 (吾妻)</p>
<p>建久3・3・13 (吾妻) 承久3・7・13 (吾妻)</p>	<p>建久3・3・13 (吾妻) 承久3・7・13 (吾妻)</p>	<p>建久3・3・13 (吾妻) 承久3・7・13 (吾妻)</p>	<p>建久3・3・13 (吾妻) 承久3・7・13 (吾妻)</p>

<p>【第十篇】 文治</p>	<p>建礼門院、六十八歳で亡くなる</p>	<p>元暦2（8・17に文治に改元）8・14（盛衰）</p>	<p>文治元・8・16（吾妻）</p>
<p>文治元・7・19</p>	<p>義経、伊豫守に任せられる</p>	<p>元暦2・7・9、12</p>	<p>元暦2（8・14に文治に改元）7・9、19（吾妻）</p>
<p>【第十一篇】 文治元・10・9</p>	<p>大地震がある</p>	<p></p>	<p></p>
<p>文治元・10・9</p>	<p>土佐坊正純、義経追討の密命を受ける</p>	<p>文治元・9・29（盛衰）</p>	<p>文治元・10・9（吾妻）</p>
<p>17 10</p>	<p>土佐坊、鎌倉を出発</p>	<p>10・11（盛衰）</p>	<p>9（吾妻）</p>
<p>文治元・10・20</p>	<p>土佐坊、京都に到着</p>	<p>文治元・9・29（平家）</p>	<p></p>
<p>文治元・10・20</p>	<p>土佐坊、義経に野心なきの起請文を書いて飲み込む</p>	<p>文治元・10・17（盛衰）</p>	<p>文治元・10・17（吾妻）</p>
<p>11・2</p>	<p>土佐坊、義経を夜討する</p>	<p>9・30（平家）</p>	<p></p>
<p>11・3</p>	<p>義経、後白河院に西国武士の協力を得る為の詔書を賜る</p>	<p>10・17（盛衰）</p>	<p></p>
<p>【第十四篇】 文治元・11・17</p>	<p>義経、都を追われる</p>	<p>11・2（盛衰）</p>	<p>（院のもとを訪れず）</p>
<p>24</p>	<p>佐藤忠信、西行に助けられる</p>	<p>3（平家）</p>	<p>11・3（吾妻）</p>
<p>文治2・2・1</p>	<p>義経、静と別れる</p>	<p>文治元・12（義経）</p>	<p></p>
<p>2・8</p>	<p>西行、蔵王堂で静を見る</p>	<p></p>	<p>文治元・11・17（吾妻）</p>
<p>3・1</p>	<p>静、僧に見咎められ、都へ送られる 静、鎌倉へ呼び寄せられる</p>	<p></p>	<p>文治2・3・1（吾妻）</p>

<p>文治5・閏4</p>	<p>文治3・2・初め</p> <p>【第十六篇】</p> <p>《文治2・2</p> <p>文治2・閏7</p> <p>9・22</p>	<p>文治2・6・下旬</p> <p>13</p>	<p>4・8</p> <p>5・中頃</p> <p>閏7</p> <p>9・16</p> <p>【第十五篇】</p> <p>文治2・6・12</p>
<p>藤原泰衡、数百騎で衣河の義経の館を攻める</p>	<p>義経、弁慶の隠れ家に味方が集まり、先のことを話し合い、出発</p> <p>義経の居場所を尋問する</p> <p>鞍馬の東光坊、南都の聖仏得業等を鎌倉に呼び、</p> <p>裏切られ討たれる</p> <p>佐藤忠信、都に入り、嘗ての女に手紙を送るが、</p> <p>平安盛、梶原景時につかまり、誅される</p> <p>義経の小舎人五郎丸、生け捕られて義経の居場所を白状する</p>	<p>行家の子息、光家殺される</p> <p>伊豆有綱、北条平六に攻められ、自害する</p>	<p>頼朝、政子、鶴が岡で静の舞を鑑賞する</p> <p>工藤、梶原、千葉、小山等、若党をつれて静の旅宿で酒宴をする</p> <p>静、義経の子を産むが、由比ヶ浜に捨てられる</p> <p>静、磯禪師とともに都を去る</p> <p>行家、北条平六と昌明法師等に討たれる</p>
	<p>文治2の末集まり、翠菴2・2に都を出発（義経）</p>	<p>文治2・1・6（義経）</p>	
<p>文治5・閏4・30（吾妻）</p> <p>記述（吾妻）</p> <p>文治3・2・10に義経が処々に隠れ住み奥州に逃げた</p>	<p>文治2・2・18（吾妻）</p> <p>文治3・2・10に義経が処々に隠れ住み奥州に逃げた</p>	<p>建久2・12・6（吾妻）</p> <p>文治2・閏7・10（吾妻）</p> <p>9・22（吾妻）</p>	<p>4・8（吾妻）</p> <p>5・14（吾妻）</p> <p>閏7・29（吾妻）</p> <p>9・16（吾妻）</p> <p>文治2・5・25に鎌倉に首が到着する。死亡はそれ以前（吾妻）</p> <p>5・13（吾妻）</p> <p>文治2・6・16。報告は6・28（吾妻）</p>

<p>6・13</p>	<p>泰衡の使者、義経の首を持参する。和田、梶原首実検する</p>		<p>閏4・晦日(平泉) 6・13(吾妻) (平泉)</p>
<p>6・16</p>	<p>泰衡の弟、忠衡討たれる</p>		<p>6・26(吾妻) (平泉)</p>
<p>7・下旬</p>	<p>頼朝、奥州征伐の発足をする</p>		<p>7・19(吾妻) (平泉)</p>
<p>8・中旬</p>	<p>鎌倉勢、阿津賀志山に攻め寄せる</p>		<p>8・7(吾妻) (平泉)</p>
<p>9・末</p>	<p>奥州平定、頼朝帰陣する</p>		<p>9・28(吾妻) (平泉)</p>
<p>文治5・12・初め</p>	<p>義経、義仲の嫡男旭の冠者、と名乗る者が現われ、泰衡の残党が騒動を起こす</p>		<p>文治5・12(平泉)</p>
<p>文治6・1</p>	<p>大河次郎兼任、七千騎で鎌倉に向けて出発</p>		<p>文治6・1・6(吾妻) 建久元・1(平泉)</p>
<p>【第十七篇】 建久3・4</p>	<p>義経、蝦夷から呉国へ渡る</p>		
<p>【第十八篇】 《仁平3》</p>	<p>常盤、十六で立后の宮に入る</p>		

* () 内の省略した作品名は以下の通りである。

・平治Ⅱ平治物語 ・古平治Ⅱ古活字本平治物語 ・盛衰Ⅱ源平盛衰記 ・平家Ⅱ平家物語 ・愚管Ⅱ愚管抄 ・吾妻Ⅱ吾妻鏡
・義経Ⅱ義経記 ・平泉Ⅱ平泉実記

* 《 》 はストーリーの流れに挿入された部分で、話が前後するところ。

中村氏や徳田氏の説では、『磐石伝』は、「史之余」という、歴史的事実を基にして、それを虚構化することが主題であった。しかし、主題となりうる歴史的事実を基にし、虚構化された部分とは一体どこを指すのであろうか。確かに、第八篇で女院の庵に盗賊が入る話、第十四篇で 戦いに疲れた忠信が西行に助けられる話、第十七篇、第十八篇等は出典も未詳であり、当時の状況から生れ得る虚構化されたエピソードと考えられるが、それらを除いた大部分は、庭鐘が歴史的事実としては受け取っていないかつた『源平盛衰記』や『平家物語』、『義経記』等を抜粋したり、修正したりしたものである。

実際のところ、義経という人が謎多き人物である。この年表に記された出来事は、『吾妻鏡』や『玉葉』、『愚管抄』といった史料に基づいたものであろう。一見多くのことが書かれているように見えるが、これらのことは、実は膨大な義経について伝えられていることの中の氷山の一角にすぎないのである。京都五条での弁慶との出会い、吉野山での静との別れ等はここには入らない。

庭鐘がいくらか史実を基に虚構化した作品を作ろうとしても、素材となるべき史実が少ないため、その史実を補うようにして作られた軍記物語に典拠を求めるとなかつたようだ。

いずれにせよ、庭鐘は『吾妻鏡』などの史料を交えつつ、『源平盛衰記』『平家物語』『義経記』などの虚構である軍記物語を基にして、『磐石伝』という作品を構成創作したのであった。つま

り、『義経磐石伝』とは、もともと史実を基に虚構化した作品ではなく、虚構化された作品を、史実を交えて義経の名の下にまとめあげた稗史小説（よみほん）なのであった。

【注】

- (1) 江戸怪異綺想文芸大系2 『都賀庭鐘・伊丹椿園集』（国書刊行会、二〇〇一年五月）
- (2) 『中村幸彦著述集』第一卷（中央公論社、一九八二年）
- (3) 鑑賞日本古典文学第35巻『秋成・馬琴』角川書店、一九七七年二月
- (4) 『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「莠句冊」の項（徳田武執筆）
- (5) 和田松江「都賀庭鐘と中国短篇白話小説」その享受をめぐって―（『香椎潟』22、一九七六年十月）
- (6) 『莠句冊』の方法（『長野県短期大学紀要』36、一九八一年十二月）
- (7) 注4に同じ。
- (8) 『繁野話』の方法（『長野県短期大学紀要』35、一九八〇年十二月）
- (9) 「都賀庭鐘の中国趣味」（『中村幸彦著述集』第11巻（中央公論社、一九八二年）
- (10) 括弧内は典拠と考えられている作品。以下同様。
- (11) 中村幸彦「作品解説」（『日本古典文学全集48』英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語、小学館、一九七三年二月）

(12) 注11に同じ。

(13) 三宅正彦「初期読本作家・都賀庭鐘の思想―『紀任重陰司』に至り滞獄を断くる話」の分析を通じて―(『大阪城南女子短期大学研究紀要』1、一九六六年)

(14) 「解説」『怪談名作集』(一九二七年十月、日本名著全集刊行會)。のち「怪異小説について」(『山口剛著作集』第二卷、一九七二年五月、中央公論社)として再録。

(15) 日本古典文学全集『義経記』付録「『義経記』関係年表 義経年譜」によれば、

「平治元 義経生まる。幼名牛若

永暦元 母常盤、牛若ら兄弟を伴い、大和の宇陀

地方に潜伏。のち自首し、清盛の妾となる。

永万元 牛若、鞍馬に入る。遮那王と称し、東光

坊の稚児となる。

承安四 3・3 遮那王、鞍馬を出て、奥州へ赴く。途中、

近江の鏡の宿で盗賊を退治、熱田で自ら元服して、源九郎義経と称す。

治承四 9 義経、奥州で頼朝拳兵を聞き、参陣のた

め駈けつく。

10・21 駿河の黄瀬川で兄頼朝と対面。

養和元 7・14 義経、鶴岡若宮の上棟式に、御家人とと

もに馬を牽く。

11・5 平軍迎撃の予定延期となる。

寿永二閏10 義仲追討のため鎌倉を発つ。

11・4 不破の関に到着。

11・7 近江に達す。

12・25 頼朝、義仲の追討を命ず。兄範頼は大手、

義経は搦手の大将軍として進撃を開始。

三 1・20 義経初陣。大勝す。

1・29 平氏追討の院宣を得、再び搦手の大将軍

として、三草山を攻略、自ら精兵三千余

騎を率い、鴨越から奇襲を敢行、大勝の

因をなす。

元暦元 8・6

一の谷合戦の軍功により、左衛門少尉、

檢非違使に任ぜらる。この頃、静を妾と

す。頼朝、義経の任官を怒る。

8・17 義経、昇殿を許さる。

二 10・11 義経、平氏追討のため京都を進発。

2・14 義経、梶原景時と逆櫓について争論す。

2・17 義経、暴風を冒して渡辺を出航、四国に

渡る。

2・18 阿波の勝浦に上陸。直ちに讃岐に進撃、

平氏を破る。佐藤継信、義経の身代りとな

って死す。

3・24 義経、壇の浦に平氏を破る。

4・21 梶原景時、義経を讒訴す。

4・29 頼朝、西国の武士らに義経に従わざるよ

う命ず。

5・7 義経、宗盛父子を伴い、鎌倉へ向う。
5・15 頼朝、義経の鎌倉入りを許さず。

5・24 腰越状を書く。

6・9 宗盛父子を伴って帰京。頼朝、義経の所
領二十四ヶ所を没収す。

文治元

8・16 伊予守に任せらる。

9・12 義経、景季と対面。

10・17 頼朝、土佐坊昌俊に義経を襲撃せしむ。

10・18 義経、頼朝追討の院宣を乞う。

10・26 義経、昌俊を捕殺。

11・3 義経、行家退京。

11・6 義経ら、大物浦より船出するも、暴風雨
にあい漂流、離散して吉野に潜伏。

11・7 義経ら解官せしめらる。

11・17 静、吉野で捕えらる。

二 2・18 義経、多武峯に潜伏の報により、鞍馬東
光坊・奈良興福寺の聖弘得業の召下しを
決す。

3・1 静、鎌倉に入る。

4・8 静、鶴岡の廻廊で舞う。

4・20 義経、叡山潜伏の疑い深まる。

6・6 頼朝、五畿七道に命じて義経を追討す。

また常盤を捕え、義経の所在を聞く。

閏7・10 義経、名を義行と改めらる。叡山潜伏が
露頭す。

閏7・29 静、男子を出生。頼朝これを由比ヶ浜に
棄てさす。

9・16 静、鎌倉を発つ。

9・22 義経の郎等佐藤忠信・堀弥太郎追捕を受
く。忠信(28)奮戦して死に、弥太郎捕
えられ、義経の奈良潜伏を自供す。

12 比企朝宗、奈良を探索。

三 2・10 義経、藤原秀衡を頼り、山伏に姿を変え
て、妻子とともに奥州に下る。

3・8 興福寺の聖弘を鎌倉に召喚す。

9 この頃義経奥州到着か。

四 10・17 義経の奥州落ちに随伴した叡山の僧俊章
捕えらる。

五 1・13 義経の書状をもった千光坊捕えらる。

2・15 泰衡、弟忠衡を殺す。

閏4・30 泰衡、義経を衣川館に攻めて殺す。弁慶
ら奮戦し、悉くこれに死す。とある。

【付記】

使用したテキスト一覧

・『義経盤石伝』↓国立国会図書館蔵本

・『吾妻鏡』↓全譯『吾妻鏡』第一卷(新人物往来社、一九

七六年十月)

・『義経記』↓日本古典文学全集31『義経記』(小学館、一九

七一年十月)

・『源平盛衰記』↓『源平盛衰記』（有朋堂、上巻は一九二二年八月／下巻は一九二二年六月）

・古活字本『平治物語』↓日本古典文学大系31『保元物語 平治物語』（岩波書店、一九六一年七月）、付録

・『繁野話』↓新日本古典文学大系80『繁野話 曲亭伝奇花 釵児 催馬楽奇談 鳥辺山調綫』（岩波書店、一九九二年二月）

・『英草紙』↓日本古典文学全集48『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（小学館、一九七三年二月）

・『秀句冊』↓江戸怪異綺想文芸大系2『都賀庭鐘・伊丹椿園集』（国書刊行会、二〇〇一年五月）

・『平家物語』↓日本古典文学全集29、30『平家物語』一、二（小学館、一は一九七三年九月、二は一九七五年六月）

・『平治物語』↓日本古典文学大系31『保元物語 平治物語』（岩波書店、一九六一年七月）

・『保元物語』↓同右

・『義経勲功記』↓東京大学総合図書館蔵本（国文学研究資料館のマイクロに拠る）

本文の引用に際して、『義経磐石伝』と『義経勲功記』とは句読点の区別がなく、すべて「。」で示されているため、適宜句読点を施した。

なお、本稿は二〇〇五年三月に千葉大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部分を改稿したものである。

（きたみ・やすひろ 渋谷教育学園幕張中学校高等学校常勤講師）